

お知らせ

- ・ **第一回、および二回のレポートを、学科事務室にて返却しています**
 - 各人、都合の良い時に、早めに取りに行ってください
- ・ **正誤のみ確認しています(点数はつけていない)。**
 - **各人、間違ったところについては、きちんと理解しておいてください。**
- ・ **課題レポート提出に関して**
 - **期限:2月9日(月)正午**
 - **提出先:物理学科事務室**

数値計算法

第十回

逆行列を求める (Gauss-Jordan法)

&

行列の固有値問題

若狭 智嗣

粒子物理学講座

Gauss-Jordan法

- ・ Gauss法
 - 行列 A の左下非対角成分を0にする
- ・ Gauss-Jordan法
 - 行列 A の左下非対角成分を0にする (Gauss法に同じ)
 - 行列 A の右上非対角成分も0にする
 - 行列 A の対角成分を1にする

連立方程式の解 x が自動的に得られる

具体例(3行3列の場合)

解くべき連立方程式

$$2x - 1y - 1z = +1 \quad (11.5)$$

$$3x - 2y + 2z = -3 \quad (11.6)$$

$$1x - 2y + 1z = -4 \quad (11.7)$$

- まず、式(11.5)を定数倍して x の係数(a_{11} に相当)を1にする。この式(11.21)を用いて、式(11.6)、(11.7)の x の係数を0にする。

$$\textcircled{1x} - \frac{1}{2}y - \frac{1}{2}z = +\frac{1}{2} \quad \dots (11.5) \times \frac{1}{2} \quad (11.21)$$

$$\textcircled{0x} - \frac{1}{2}y + \frac{7}{2}z = -\frac{9}{2} \quad \dots (11.6) - (11.21) \times 3 \quad (11.22)$$

$$\textcircled{0x} - \frac{3}{2}y + \frac{3}{2}z = -\frac{9}{2} \quad \dots (11.7) - (11.21) \times 1 \quad (11.23)$$

具体例(3行3列の場合)ー続きー

2. 次に、式(11.22)を定数倍して y の係数(a_{22} に相当)を1にする。この式(11.25)を用いて、式(11.21)、(11.23)の y の係数を0にする。

$$1x + 0y - 4z = +5 \quad \dots (11.21) - (11.25) \times \left(-\frac{1}{2}\right) \quad (11.24)$$

$$0x + 1y - 7z = +9 \quad \dots (11.22) \times (-2) \quad (11.25)$$

$$0x + 0y - 9z = +9 \quad \dots (11.23) - (11.25) \times \left(-\frac{3}{2}\right) \quad (11.26)$$

3. 最後に、式(11.26)を定数倍して z の係数(a_{33} に相当)を1にする。この式(11.29)を用いて、式(11.24)、(11.25)の z の係数を0にする。

$$1x + 0y + 0z = +1 \quad \dots (11.24) + (11.29) \times 4 \quad (11.27)$$

$$0x + 1y + 0z = +2 \quad \dots (11.25) + (11.29) \times 7 \quad (11.28)$$

$$0x + 0y + 1z = -1 \quad \dots (11.26) \times \left(-\frac{1}{9}\right) \quad (11.29)$$

結果から分かるように、この方法では求める解 x が自動的に得られている。

演習

- ・ Gauss-Jordanの消去法により、連立方程式を解くサブルーチンを
`/home/teacher/z6wt01 in/SAMPLE/jordan. f`
に置く。

このサブルーチンを用いて、連立方程式

$$2x + 4y + 6z = 6$$

$$3x + 8y + 7z = 15$$

$$5x + 7y + 21z = 24$$

を数値計算により解け。

プログラム(jordan)の説明(入出力のみ)

(/home/teacher/z6wt01 in/SAMPLE/jordan.f)

```
subroutine jordan(n,f,b)
implicit none
c*****
c Gauss-Jordan の消去法により n 元連立方程式
c   Ax = b
c   の解を求める。
c   入力
c   n: 次元
c   f: 係数行列 A の要素 (n x n)
c   b: ベクトル b の要素 (n)
c   出力
c   b: 解 x
c*****
c input/output:
integer n
real    f(n,n),b(n)
```

このプログラムの
機能

結果(解)は
b に上書きされる
(b の内容は破壊)

演習の答え

$$x = -33$$

$$y = 9$$

$$z = 6$$

Gauss-Jordan法により逆行列を求める

- ・ Gauss-Jordan法

- 行列 A の左下非対角成分を0にする (Gauss法に同じ)
- 行列 A の右上非対角成分も0にする
- 行列 A の対角成分を1にする

Gauss-Jordan法は A を E (単位行列) に変換している
(A に A^{-1} をかけて E にしている)

同じ操作を E に対して
行くと...

E に A^{-1} をかけるので A^{-1} に変換される

演習

- ・ Gauss-Jordanの消去法により、逆行列を求めるサブルーチンを
`/home/teacher/z6wt01 in/SAMPLE/matinv_jordan. f`
に置く。

このサブルーチンを用いて、次の5行5列の行列

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 2 & 2 & 2 \\ 1 & 2 & 3 & 3 & 3 \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 4 \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \end{pmatrix}$$

の逆行列を数値計算により求めよ。

- ・ 上記で求めた逆行列が正しいことを、筆算と数値計算により確認せよ

プログラム(matinv_jordan)の説明(入出力のみ)

(/home/teacher/z6wt01 in/SAMPLE/matinv_jordan.f)

```
subroutine matinv_jordan(n,a)
implicit none
c*****
c Gauss-Jordan の消去法により n 次正方行列 A の
c 逆行列 A-1 を求める。
c 入力
c   n: 次元
c   a: 行列 A の要素 (n x n)
c 出力
c   a: 逆行列 A-1 の要素
c*****
c input/output:
integer n
real*8 a(n,n)
```

このプログラムの
機能

結果(解)は
a に上書きされる
(a の内容は破壊)

行列要素は倍精度
(real*8)である必要
がある

プログラム例

```
c const
    integer N          ! 行列の次元
    parameter(N=5)

c local variable
    real*8 a(N,N)    ! 行列要素 (倍精度)

c for loop
    integer i,j
```

```
c begin
    a(1,1)= 1.
    a(1,2)= 1.
    ----- 途中略 -----
    call matinv_jordan(N,a)
```

```
    do i=1,5
        write(*,'(5f7.2)') (a(i,j),j=1,5)
    end do
```

行に関するループ
1行目から5行目

列に関するループ
1列目から5列目の要素が
同一行に出力される

----- 以下略 -----

計算(出力)例

kterm

```
% frt -o matinv_jordan_test matinv_jordan_test.f matinv_jordan.f
matinv_jordan_test.f:
matinv_jordan.f:
Linking:
% ./matinv_jordan_test
  2.00  -1.00   0.00   0.00   0.00
 -1.00   2.00  -1.00   0.00   0.00
  0.00  -1.00   2.00  -1.00   0.00
  0.00   0.00  -1.00   2.00  -1.00
  0.00   0.00   0.00  -1.00   1.00
% █
```

演習の答え

$$\begin{pmatrix} 2 & -1 & 0 & 0 & 0 \\ -1 & 2 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 2 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & -1 & 2 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & -1 & 1 \end{pmatrix}$$

固有値と固有振動—線形物理学と非線形物理学—

- ・ 物理学の(かなり大雑把な)分類の1例
 - 線形物理学
 - 非線形物理学
- ・ 線形物理学の例
 - 力学のなかの弾性論
 - 電磁気学
 - 量子力学(波動方程式)
- ・ 線形物理学一般
 - 対象とする形に固有のモード(波動)の固有値、固有運動(振動)を求める問題に帰着
 - 固有振動を求めるという意味では以下の分野でも重要
 - ・ 原子核物理学
 - ・ 固体物理学

極めて適用範囲が広く、それゆえ数値計算も重要である

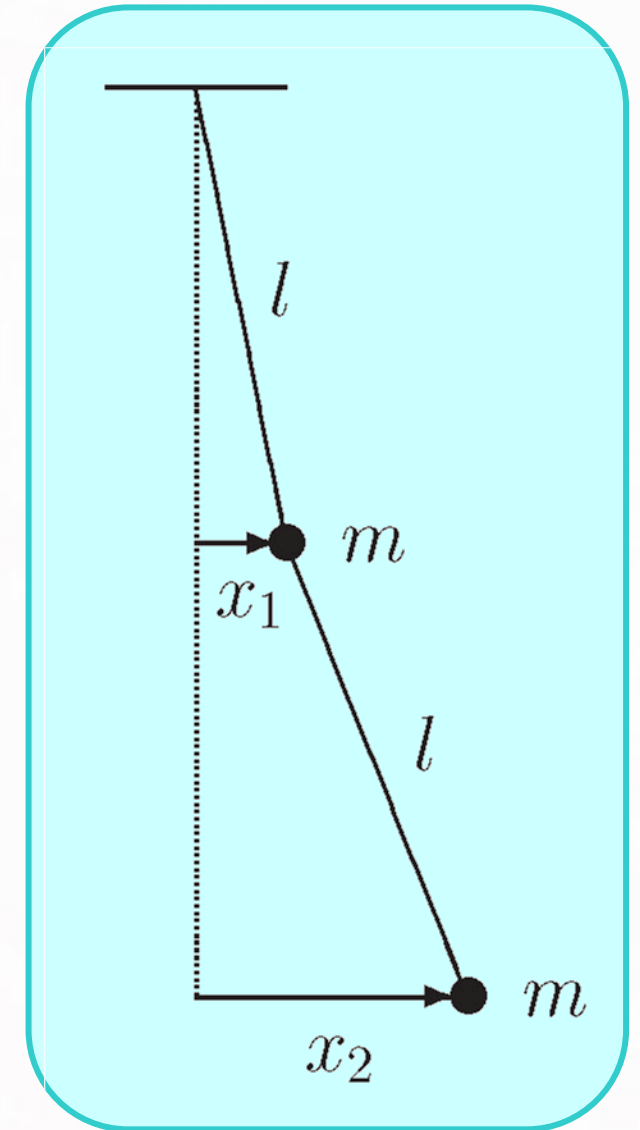
行列の固有値問題の具体例—2重振り子—

- 微小振動

$$\left| \frac{x_1}{l} \right| \ll 1, \quad \left| \frac{x_2}{l} \right| \ll 1$$

の場合、系のラグランジアンは

$$\mathcal{L} = \frac{m}{2} (\dot{x}_1^2 + \dot{x}_2^2) - \frac{1}{2} \frac{mg}{l} \{2x_1^2 + (x_2 - x_1)^2\}$$



Lagrangeの運動方程式

- Lagrangeの運動方程式

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{x}_i} \right) - \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial x_i} = 0$$

連立方程式

$$\begin{aligned} m\ddot{x}_1 &= -\frac{mg}{l}2x_1 + \frac{mg}{l}(x_2 - x_1) \\ m\ddot{x}_2 &= -\frac{mg}{l}(x_2 - x_1) \end{aligned}$$

- 固有振動(2つの質点と同じ角振動数 ω で振動)の場合

$$\ddot{x}_1 = -\omega^2 x_1, \quad \ddot{x}_2 = -\omega^2 x_2$$

$$\begin{aligned} (3\omega_0^2 - \omega^2)x_1 - \omega_0^2 x_2 &= 0 \\ -\omega_0^2 x_1 + (\omega_0^2 - \omega^2)x_2 &= 0 \\ \omega_0^2 &= g/l \end{aligned}$$

行列・固有値問題へ

- 行列を用いた表現

$$\begin{pmatrix} 3\omega_0^2 & -\omega_0^2 \\ -\omega_0^2 & \omega_0^2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \omega^2 \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$$

$$\downarrow \lambda = \omega^2 / \omega_0^2$$

$$\begin{pmatrix} 3 & -1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \lambda \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$$

- 固有値問題(固有値方程式)

$$\begin{vmatrix} 3 - \lambda & -1 \\ -1 & 1 - \lambda \end{vmatrix} = 0$$

演習

- ・ 例題の2重振り子の固有振動を求めよ。
つまり以下の量を求めよ。
 - 系の運動エネルギーと位置エネルギー
 - 系のラグランジアン
 - ラグランジの運動方程式
 - 運動方程式から導かれる行列を用いた式と固有値方程式
 - 2つの固有値
 - 各固有値に対応した固有ベクトル
- ・ それぞれがどのような振動運動か図示せよ。

演習の解答

- 系の運動エネルギー

$$T = \frac{1}{2} m (\dot{x}_1)^2 + \frac{1}{2} m (\dot{x}_2)^2$$

- 系の位置エネルギー

質点1, 2の振れ角を θ_1, θ_2 とし、 $\theta_1 = \theta_2 = 0$ をポテンシャルの基準にとる

- 質点1

$$\sin\theta_1 \approx \theta_1 = \frac{x_1}{l}$$

$$\begin{aligned} V_1 &= mgl(1 - \cos\theta_1) \approx \frac{1}{2} mgl\theta_1^2 \\ &= \frac{1}{2} \frac{mg}{l} x_1^2 \end{aligned}$$

- 質点2

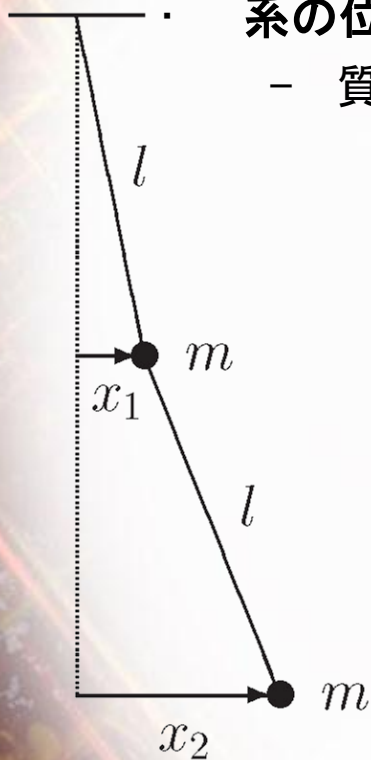
$$\sin\theta_2 \approx \theta_2 = \frac{x_2 - x_1}{l}$$

$$\begin{aligned} V_2 &= V_1 + mgl(1 - \cos\theta_2) \approx V_1 + \frac{1}{2} mgl\theta_2^2 \\ &= \frac{1}{2} \frac{mg}{l} x_1^2 + \frac{1}{2} \frac{mg}{l} (x_2 - x_1)^2 \end{aligned}$$

- 全体

$$V = V_1 + V_2 = \frac{1}{2} \frac{mg}{l} [2x_1^2 + (x_2 - x_1)^2]$$

- 系のラグランジアン $L = T - V$



演習の解答—固有値と固有ベクトル—

・ 固有値 $\lambda = 2 + \sqrt{2}$

– 固有ベクトル

$$x_2 = -(\sqrt{2} - 1)x_1$$

– 規格化された固有ベクトル

$$x_1 = \pm \sqrt{\frac{1}{2(2 - \sqrt{2})}} = \pm 0.92388 \dots$$

$$x_2 = -(\sqrt{2} - 1)x_1 = \mp 0.38268 \dots$$

・ 固有値 $\lambda = 2 - \sqrt{2}$

– 固有ベクトル

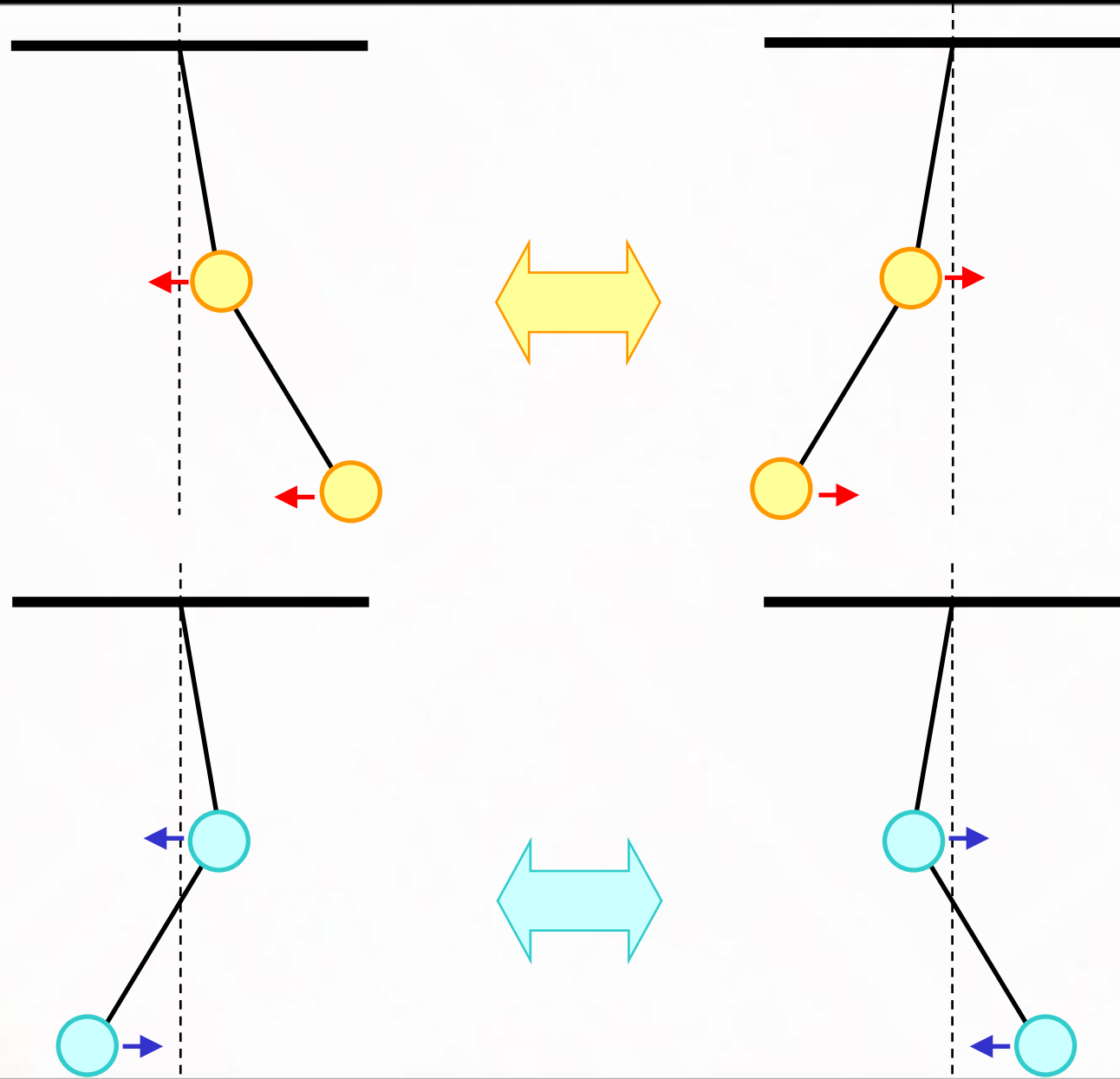
$$x_2 = (\sqrt{2} + 1)x_1$$

– 規格化された固有ベクトル

$$x_1 = \pm \sqrt{\frac{1}{2(2 + \sqrt{2})}} = \pm 0.38268 \dots$$

$$x_2 = (\sqrt{2} + 1)x_1 = \pm 0.92388 \dots$$

演習の解答(概観)



行列の固有値問題

- 固有値問題

$$\begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = \lambda \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$$



固有値 λ と
固有ベクトル x
を求める

- 固有値方程式

$$\begin{vmatrix} a_{11} - \lambda & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} - \lambda & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \dots & a_{nn} - \lambda \end{vmatrix} = 0$$



λ に関する
 n 次方程式の解
(一般に解くのが困難)

- 物理学でよく出てくる固有値方程式(2重振り子等)

$$A = \begin{pmatrix} \alpha_1 & \beta_1 & 0 & 0 & \dots & 0 & 0 \\ \beta_1 & \alpha_2 & \beta_2 & 0 & \dots & 0 & 0 \\ 0 & \beta_2 & \alpha_3 & \beta_3 & \ddots & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \beta_3 & \alpha_4 & \ddots & 0 & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & \ddots & \alpha_{n-1} & \beta_{n-1} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \beta_{n-1} & \alpha_n \end{pmatrix}$$



対角要素とそれに
隣り合う要素のみが
非0で対称

↓
簡単化



3重対角行列の固有値問題の数値解法

- ・ 3重対角実対称行列の解法
 - スツルムの定理 (定理の説明は省略)
- ・ 推奨される態度
 - 3重実対称行列のような特別な(疎な)行列に対してなら、固有値を求めるプログラムがすでにあるはずである
 - ・ (だから、スツルムの定理を知らなくても解けるはず)
- ・ 多くの有用な計算プログラムが掲載された本
 - 「Numerical Recipes in Fortran 77, Second Edition」
W.H.Press, S.A.Teukolsky, W.T.Vetterling, and B.P. Flannery
 - 3重対角実対称行列の固有値を求めるプログラムが掲載
- ・ 既存のプログラム(ライブラリ)を用いる際の注意
 - プログラムの動作・制限を正しく理解する
 - ・ 自分の必要としているものか?
 - 入力・出力を正しく理解する
 - ・ 正しく使用する

プログラム(tqli)の説明

(/home/teacher/z6wt01in/SAMPLE/tqli.f)

```
subroutine tqli(d,e,n,z)
  implicit none
c*****
c 機能:
c   n次3重対角実対称行列の固有値・固有ベクトル
c   を求める
c 入力:
c   d(1)-d(n) : 対角行列要素
c   e(2)-e(n) : 対角行列要素に隣り合う要素
c               (e(1)は任意)
c   n         : 行列の次元
c   z(n,n)    : 単位行列要素
c 出力:
c   d(1)-d(n) : n個の固有値
c   z(n,n)    : 規格化された固有ベクトル
c               : i列目が固有値d(i)に対応
c 注意:
c   1. 関数: pythag(a,b)が必要
c   2. eの内容は保存されない
```

プログラムの
機能

上書きされる

Numerical
Recipes
に載っている

上書き
される

プログラム(pythag.f) (説明省略)

(/home/teacher/z6wt01 in/SAMPLE/pythag. f)

```
      real function pythag(a,b)
      implicit none
c input/output:
      real a,b
c local:
      real absa,absb
c begin:
      absa=abs(a)
      absb=abs(b)
      if(absa.gt.absb)then
        pythag=absa*sqrt(1.+(absb/absa)**2)
      else
        if(absb.eq.0.)then
          pythag=0.
        else
          pythag=absb*sqrt(1.+(absa/absb)**2)
        endif
      endif
      return
      end
```

道具として使えばよい



コピーしてリンクすればよい

演習

- n 次3重実対称行列の固有値・固有ベクトルを求めるためのサブルーチンと関数を

`/home/teacher/z6wt01 in/SAMPLE/tqli.f`

`/home/teacher/z6wt01 in/SAMPLE/pythag.f`

に置く。

- このサブルーチンを用いて、3重振り子の固有振動を求めよ。
3重振り子の固有値方程式は、

$$\begin{pmatrix} +5 & -2 & 0 \\ -2 & +3 & -1 \\ 0 & -1 & +1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = \lambda \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \quad \lambda \equiv \frac{\omega^2}{\omega_0^2} \quad \omega_0^2 \equiv \frac{g}{l}$$

で与えられる。

この関係式を満たす λ (固有値)と x (固有ベクトル)を求めよ。

- 各々どのような運動か、簡単に図示せよ。

プログラム例

```
program furiko
implicit none
c
integer N
parameter (N=3)
c local variable
real d(N) ! 対角要素 & 固有値
real e(N) ! 非対角要素
real z(N, N) ! 単位行列 & 固有ベクトル
c for loop
integer i, j
```

行列の次元
(今の場合3)

プログラム例(続き)

```
c begin
```

```
d(1) = 5.0
```

```
d(2) = 3.0
```

```
d(3) = 1.0
```

```
e(2) = -2.0
```

```
e(3) = -1.0
```

```
do i=1, N
```

```
do j=1, N
```

```
if (i.eq.j) then
```

```
z(i, j) = 1.0
```

```
else
```

```
z(i, j) = 0.0
```

```
endif
```

```
end do
```

```
end do
```

対角要素を代入

非対角要素を代入

単位行列を生成

対角要素なら

非対角要素なら

行に関する
ループ

列に関する
ループ

プログラム例 (続き)

```
call tqli (d, e, N, z)
```

```
do i=1, N
```

```
  write (*, '(i2, a, f7.4, a, f8.5, a, f8.5, a, f8.5, a)')
```

```
&
```

```
  i, '-th eigen value:', d(i),
```

```
&
```

```
  ', eigen vector: (' , z(1, i), ', ', z(2, i), ', ', z(3, i), ')'
```

```
end do
```

固有値
に関する
ループ

サブルーチンを呼んで、
固有値と固有ベクトルを求める

書式(フォーマット)を使って、
表示を分かり易くしている

実際の出力と比較してみることに

実行結果の例

ah.s.kyushu-u.ac.jp:22 - Tera Term VT

ファイル(F) 編集(E) 設定(S) コントロール(O) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

```
% frt -o furiko furiko.f tqli.f pythag.f
```

```
furiko.f:
```

```
tqli.f:
```

```
pythag.f:
```

```
Linking:
```

```
% furiko
```

```
1-th eigen value: 6.2899, eigen vector:(-0.83599, 0.53919,-0.10193)
```

```
2-th eigen value: 2.2943, eigen vector:( 0.50490, 0.68305,-0.52775)
```

```
3-th eigen value: 0.4158, eigen vector:(-0.21494,-0.49266,-0.84326)
```

```
%
```